勿凝学問 145

若い人が政府の利用価値を実感するということとは
映画 SiCKO の中で僕が一番多く人に話をしてきたシーン

2008 年 4 月 12 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

去年の 8 月 26 日に SiCKO をみている模様。
その後、幾度となくこの映画に触れることになる。その中で僕が一番多く人に話をするシーンをメモっておく。

アメリカからフランスに移住してきた若い人たち数人と、マイケル・ムーアがパブで話をしている。その中で、ある女性が次のように語る。

（字幕）
フランスで暮らしていると罪悪感を感じるわ
あまりに、いろんな面で恵まれてて
私は若くして享受してる
でも（アメリカにいる）両親は働きづめに働いても――
こんな生活には程遠い
心が痛むわ
あまりに恵まれすぎた生活で
そりゃ　上を見ればキリはないけど　あまりにも――
不公平よ

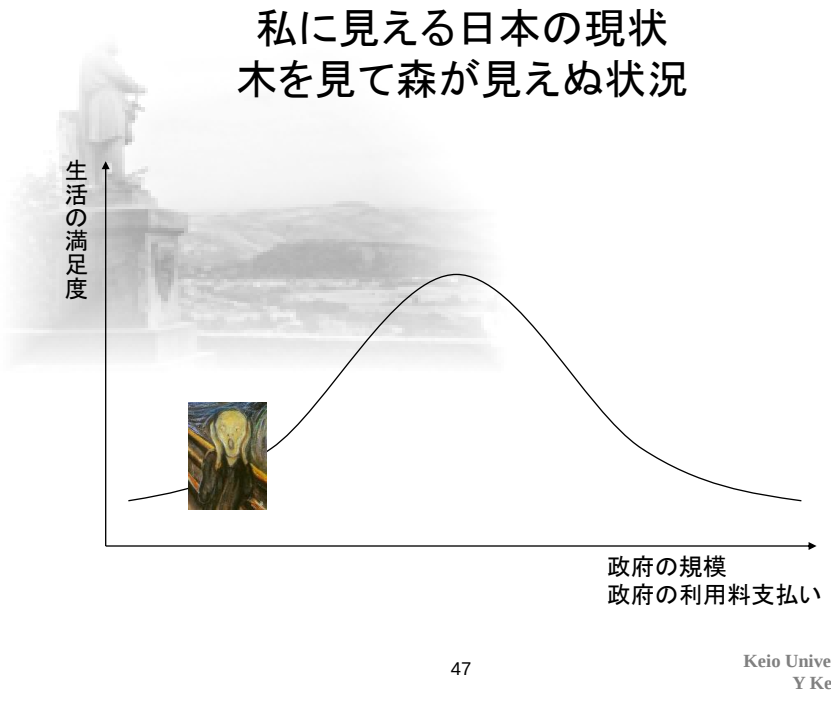
（音声　日本語）
フランスで暮らしていると自分の実家に対して罪悪感を感じるの
こっちだといろんな面で恵まれてるでしょう
まだ若いのにこんなに恩恵を受けてる
でも（アメリカにいる）両親は働きづめに働いても――
こんな生活には程遠い
心が痛むわ
自分はここで、こんなにも恵まれて暮らしてる
そんなすごい生活はしてないけど　比較したらやっぱり違う――

これって　あまりにも不公平

今年から映画を観ることができるように春集中 2 コマ連続講義に変更し
2008 年 4 月 11 日に講義のガイダンスで SiCKO を観た夜

手帳をみると、昨年 8 月 26 日に SiCKO を観た翌日に、ちょっとハプニングがあった京都府保険医協会で話をしている模様（参照　勿凝学問 107　それでも負担増しか途はない・・・　――共産主義とは国民負担率 100%のことなんだけどなぁ）。

京都では、政府の規模が小さいから人々が大きな不安をかかえながら生きていることをムンクの「叫び」で表した、次のスライドを使っている――おそらく、SiCKO をみた夜に作ったのだろう。



政府不信が強いから負担増ができないのか、負担増を認めないから政府の利用価値を実感できないのか――that's the question.